



英米文学

著者略歴

昭和12年3月東北大学文学部英語英文学科卒業。

東京工業大学，千葉大学を経て現在実践女子大学教授，昭和女子大学，東京女子大学講師，文学博士

主要著書 「ジェイムズ・ジョイス二十世紀英米文学案内(研究社)」「比較文学—その概念と研究例」(研究社)「比較文学講座全四巻」(清水弘文堂)「翻訳文学」日本文学講座14(岩波書店)「翻訳文学」(三省堂)ウォーレン・ウエレック「文学の理論」(筑摩書房)ホーソン「緋文字」(河出書房新社)パイロン「海賊」(岩波文庫)モーム「雨」(河出文庫)ステイブソン「シキルとハイド」(中央公論社)「叛逆の芸術—世界のボヘミアン，サダキチ・ハルトマンの生涯」(東京美術)

検	省
印	略

昭和51年 2月15日 初版発行

著者	太田三郎
発行者	清水秋夫
発行所	株式会社 清水弘文堂

東京都千代田区猿楽町
小黑ビル 2—4—2
TEL・東京 293—9708

組版／海外印刷KK・印刷／K・M・S・製本／K・M・S

目次

D・H・ロレンス	「処女とジプシー」	三
ジェイムズ・ジョイス	「悲惨な事件」	二九
トマス・ハーディ	「空想の中に生きる女」	五九
トマス・ハーディ	「帰郷」	八六
ナサニエル・ホーソン	“Twice-Told Tales”	一〇七
ジョン・スタインベック	「菊」	一三九

ウィリアム・フォークナー 「エミリーへ捧げるバラ」	一六四
カート・ヴォニガット 「母なる夜」	一九二
ヘンリー・ジェームズ 「ねじの回転」	二二一

あとがき

英米文学―作品の解釈と批評

D・H・ロレンス『処女とジプシー』

1

D・H・ロレンス『処女とジプシー』“The Virgin and the Gipsy”は作者の死後一九三〇年になって公刊され妻フリーダに捧げられている。しかし実際には一九二六年の初めには作品として完成していたものと推測されている。それを証する手紙が残っている。一方ロレンスの問題作『チャタレイ夫人の恋人』は一九二六年末から翌年の三月頃にかけて第一稿が成立したと考えられているし、一九二八年七月にフロレンスで私家版が出ている。『チャタレイ夫人の恋人』はその性の意識と人間関係の設定のしかたで特異な解釈をしめしていることは今さら言うまでもない。この作品にえがかれた性の意識と人間関係は、作品成立の順序から見ると、『処女とジプシー』と最も縁が深そうである。即ちこの作品が書きおえられると引きつづいて『チャタレイ夫人の恋人』が着手さ

れたことになっている。

内容の面から考えても『処女とジプシー』はロレンスの考える性の意識と人間の関係とを特徴的に展開してみせている。『チャタレイ夫人の恋人』にいたる段階を示すといつてよい。この試論では作品に即しつつその表現するところをとらえてみる。

まずこの作品の筋は次の通りである。——イギリスの南部の村パプルウィック Papplewick の牧師館に牧師とその母親と妹、弟、それから娘二人が住んでいる。牧師の妻は娘たちがまだ幼いとき、年下の青年と駆け落ちしてしまった。それ以後牧師は再婚していない。母親が家庭の中心になっている。娘二人は成人し、ローザンヌの学校から帰ってくる。二人の娘は牧師館の生活に窒息しそうになっている。ある日姉妹ルシルとイヴェット Lucille, Yvette が友人たちとドライブへ出かけたとき、偶然ジプシーの男とその家族を知り、石切場の跡にはられたキャンプを訪れる。そこで一行のうち四人の娘たちはジプシーの老女に運勢を判断してもらう。このようにしてジプシーの男と妹娘イヴェットとの交渉がはじまる。それ以後四回、合計五回イヴェットはジプシーの男に会う。その間イヴェットは段々と本能的に男に魅せられてゆく。ある早春の日、洪水が牧師館をおそい、祖母は溺死するがイヴェットはたまたま来合わせたジプシーの男の必死の努力によって救われる。イヴェットは氷のような水に濡れた軀をジプシーの軀と固くあわせて、辛うじて凍死を免がれたのである。イヴェットは魅惑されていた男と計らずもこのような環境で相擁することになったが、男はイヴェットの眠っ

ている間に姿をけしていた。

2

この試論においてはイヴェットとジプシーの男との交渉から、ロレンスの考えをとらえてみる。そのためストーリーの全体にわたらないのでそのかわり作品にでてくる人物を予め一瞥しておく。牧師は四十七才。男前のよい善良な夫であるが、娘二人がまだ幼い時妻は年下の若い男と駆け落ちしてしまった。そういう目に合わされながら牧師は妻のことを忘れられず、結婚当時の面影を胸に抱いていた。「白い雪の花」White snow-flower として牧師の胸には永久に妻の面影が咲きつづけている。そのため再婚しないのである。しかし牧師が純真無垢な人間であったというわけではない。牧師は悲劇的な容貌をしているが、どことなく虚偽の感がただよっている。自己を凡て正しいとする態度があるし、職業柄も精神主義である。愛情、信頼、明朗を表面装っているが本心には自己中心の暗い影がひそんでいる。そして自分の心の中心が a fat, awful worm 恐ろしい、ぶくぶくした虫、であることを知っていて他人にそれを知られるのを恐れている。

娘たちに対しては若い者の心をよく理解しているような態度をとりたいし、一方では母やジプシー叔母 Aunt Cissie ——自分の妹——に対しては物わかりのよい人間であり、権威をもって一家の中心として調和を計ってゆきたいのである。しかし人間的誠実さを欠き、同時に真心から人を愛しえない男である。妻が駆け落ちした時、こんな立派な夫をもちながら、つまらない年下の男と何故逃げだし

たか、と世間の人々は噂した。「そのとき信心深い人たちは、悪い女だといったが、立派な婦人たちのなかには黙っている人たちがいた。その人たちにはよく分っていたのだ」と描かれている。これは痛烈な批評である。この婦人たちは妻が誠実と愛情とを青年に見出し、人間としての喜びを得ていたことを、認めていたのである。そういう人間であるから父親は娘たちには心から親しめる存在ではなかった。一方、母にとっては、表面を奇麗に飾り、何事でも理解しているという牧師の態度は、利用しやすいものであった。

牧師の妻は作品中に直接登場することがない。人々の噂の中に、また想い出のなかに出てくるのみである。人々により「いらくや」、「nettle」とか「シンシアとこう名の女」、「She who was Cynthia」という風と呼ばれている。しかも駆け落ちする前の姿が語られるだけである。夫の抱いているイメージ、世人の噂、メイター＝祖母 Mater とシンシーの批評として描かれるのも面白い技巧である。いわゆる節操はないが美貌の女である。人々の噂では墮落した女、肉慾に負けた女となっているのに、夫は妻としての肉体的な生活面ではなく、新婚当時の「白い雪の花」——清浄無垢、精神的存在、としてのみ記憶している。これは牧師が肉体を無視した眼で妻をみていたことを示すのであろう。駆け落ちしたことを理解しうる婦人が世間にはいる、ということとは、牧師の自己中心主義と精神主義の犠牲になるのでは女として、妻としてあまりに可愛想である、そんな境涯から脱れて女の喜びをえようとしたシンシアの気持ちがわかる、ということであらう。シンシアには「グラマーで美貌」という形容

詞が用いられているが、この言葉は、この間の意味を物語っている。

牧師の俗物主義は社会的には立派に通用しても、女としては受け入れがたいものである。妻の駆け落ちの真相は誠実、愛情、性の充足、女の喜びというものに関わっていたことが、示唆されている。またシンシアはモラルを信じない女、ともされている。これもモラルのもつ偽善と欺瞞とをシンシアが直覚していたことをあらわしている。祖母はシンシアが性の充足を求めたことを、自分の女の性から理解しうるが故に、逆にシンシアに反撥し非難したのであろう。しかし作品においては祖母自身が動物的存在という感を読者にあたえている。

娘二人してみると、七才と五才の姉妹を棄てた母親であつても本能的には懐しい存在である。かつ、豊満な女ながら頼りにならぬ女である。しかし、姉妹には母親の出奔の真相はまだ理解されていない。祖母はとくに妹娘イヴェットに、ときに姉のルシルに、二人の母親の血を発見して嫌悪する。それは姉妹が若い女として性的に成熟した姿や態度をみせることである。また二人が自由を求めて自我を主張するときである。姉妹は性の充足の要求と自我の主張とにおいて、その母親と断ちがたい絆でつながれている。祖母にはこれが自己の權威に対する挑戦とみえるのである。

祖母は *Mater* と呼ばれているが、偽善的なエゴイズムと、生理的、動物的な肉体的存在の女である。人間としての生命——誠実、純愛、などをもたぬものである。妻が駆け落ちした後牧師が妻の想い出を抱いているのを知ると、その愛情を狡猾にほめて再婚を妨げる。息子の再婚により牧師館の中

心としての自己の存在を失いたくないからである。祖母は息子を表面に立てながら実は家族に対して絶対的な支配権を確保しようとしている。家庭は祖母のエゴの延長であり、家の中は祖母の臭いで満ちあふれ、窒息しそうである。孫娘の友人の撰択にまで干渉しようとする。

祖母は二人の孫娘のうち特に姉のルシルを憎んでいて、あるときは、「わたしたちは腐りかけたような血筋ではないからね」とルシルを罵る。孫娘の悪いところはすべて駈け落ちした嫁のせいにしてしまう。イヴェットに対しては同様に罵るが、その夢想的な非合理的なところにはときとして親近感が抱けるのであった。

シンシー叔母は四十才をこえているが、メイターのために一生を犠牲にした女である。いや一生だけでなくその性をも失った女である。その意味でヒステリーであるし、女としての最も本源的な生命をもたぬもの、信仰心に厚いがその内心は虫ばまれている女、として描かれている。若い姉妹とは対照的であり、祖母の動物的存在に対して歪められた精神でのみ生きている存在である。メイターとシンシーとは対照的な取り合わせとなっている。ジブシーが物を売りにきた時、その好男子であるのと媚びるような態度をみて好意をよせるあたりにシンシーの姿が巧妙にえがかれている。シンシーは性的充足を知らぬ女として調和のない女であり、「精神」主義という面からも、若い姉妹には大きな枠である。この女は一度びバランスを崩すと狂的となり悪魔のような憎悪にかられる。性の充足を求めて駈け落ちしたシンシアには深刻な憎悪を抱くのは当然である。教会の窓硝子の基金をイヴェットが預ってい

だが、イヴェットはそれを使いこんでしまふ。そのときのイヴェットに対する憎悪の表現はすさまじい。

イーストウッド夫妻というのが登場する。この二人はジブシーのキャラバンに來会わせて、イヴェットと知り合いになる。夫人は三十六才で夫はずっと年下であり、夫人は子供をつれて再婚したのである。夫人はグラマラスな女で性的存在そのものと見える。イヴェットはこの夫婦の家庭を訪問する。この夫妻の生活ぶりは若い娘には驚きであった。そして男女を結ぶものは何かと姉のルシルに訊ねる。その答は性であった。こういうことは、この夫婦の様子からイヴェットが考えさせられたところである。後に記すようにジブシーの男の性的魅力にとらえられていたイヴェットは、この夫婦の生活に刺激されジブシーに抱かれないとねがう。しかし、それは好色な気持であろうかとイヴェットは悩んでいる。これはイヴェットがイーストウッド夫妻の生活によって眼をひらかれた世界である。こういう雰囲気をつくる夫婦はただよわしていた。なおルシルが男女の關係は性であると答えたとき、低俗な性とまた別の性があると言い、平凡な人間は低俗な性を感じさせる、と説明したことは注目しておきたい。後にジブシーに対しイヴェットの抱く輕蔑した感情にこれが反映している。

これらの人物をみると、まず牧師は人間としての本質的な生活に欠けていることがわかる。牧師は俗物、偽善の存在である。祖母は動物的本能的で、利己主義、シシー叔母は性を失った女であってその意味で片輪である。祖母は性を知る故に孫娘の性の意識に対し敏感に反撥し非難しようとする。こ

のように牧師の家庭には人間性の純真なるものが存在していない。いずれも表面だけ道徳ぶっているにすぎない。それ故に一層窒息させられる気が姉妹にはするのである。一方、シンシアは本能充足の喜びを求めたもの、その点でイーストウッド夫妻と同じである。牧師と祖母がこの夫妻を嫌悪するものこの点の故であった。

こういう人物の形成する生活が、自由を求める若い姉妹をとりまいていくわけである。そしてジプシーの環境と生活とは、牧師館の生活と正に対照的であった。妹娘はこの二つの間に立って、性にめざめてゆく。

3

なお第四章でルシルがイヴェットの服をぬつてるとき起こる口論の場には五人の女——祖母、叔母、姉と妹、それに「シンシアという名の女」が全部登場してくる。姉が妹のために仕立てている服をイヴェットは試しに着てみる。部屋中に生地や道具類が投げだされているので、シンシア叔母が少し片づけてくれという。イヴェットは返事をするだけで何もしない。そのうち合わせ鏡にしていた鏡がピアノの上から床に落ちる。これが動機で祖母が口論に加わってくる。その鏡が駆け落ちした女の持物であったところから、姉妹のことを、腐りかかった血をうけたものと皮肉する。それを聞いてルシルが祖母に「お黙り！」とどなる。シンシア叔母が祖母に味方してルシルにとびかかり部屋から追い出す——こういう騒ぎが始るのである。四人がそれぞれ本性をあらわして

むきになるところが、いかにも四人の性格、家庭内に鬱積した空気、權威を守ろうとする者と抑圧をはねかえそうとする者とのヒステリックな組み合わせ、しかもその根本に介在する駆け落ちした女の存在、こういうものがあざやかに描きわけられている。

イヴェットとルシルにはレオ Leo のような男友達がいる。いずれも伝統に反抗する若者たちである。しかし日常生活では自分たちの自由にまかされているので、直接反抗すべき拘束をもっていない。そこで彼らは無氣力である。打破すべきものが目の前にあり、これをのり越えなければ自分の生活が破滅するというのであれば闘志がわくであろうし、生活にも活気が生まれてこよう。ところが青年たちの両親が放任しているため、逆に、無氣力な青年になっていた。この点がルシルとイヴェット姉妹の生活とちがっている。姉妹には祖母がいて、家庭の中心になり、一切を自分の意志によって動かそうとしている。これは強力な桎梏である。また叔母がいて、若い娘にたいする嫉妬心で二人を監視している。さらに父親がいる。この父親は祖母や叔母とちがって強制監視することはないが、いかにも物わかりのよい父親らしい振舞いによって姉妹に真綿でしめつけるような感じを与える。それから自分たちの母親の存在——その『汚辱』の経歴が姉妹に目に見えぬ圧迫感をあたえる。

ルシルとイヴェットはそれ故、直接ぶつかってゆくべきものを持っていた。祖母の狡猾きわまるやり方、叔母のヒステリックな言動という差こそあれ、姉妹は自己の自由な生活を拘束されている。くさったような空気が家庭内によんどんでいて、窒息しそうである。それかといって、イヴェットには

レオら青年たちの無気力なのが我慢ならない。自分の抑えがたい不満を解消してくれる相手はどこにもいないのである。

一方、イヴェットの空虚な、放心状態になる性質がくりかえし描かれている。何となく落ちつかない、いらいらしたものを感じていて、外へ出歩くことも多い。若い娘らしく落ちつかぬ心とは何ものかを期待する心、意味なく不安にかられる心のことであろう。この心はその機微をつかむ者によってたやすく捉えられる。ここにジブシーの男が力を及ぼすより所があった。

ルシイルは妹にくらべて万事に慎重であり、妹のイヴェットとは対照的とおもえる。町に秘書の仕事をもっていて、ルシイルは毎日出かけているほどで、妹ほど、反撥的に周囲へ反抗することはない。しかし、ルシイルもやっぱり若い娘であり、いらいらした気持がひそんでいる。そして時に昂奮してしまふことがある。イヴェットの服をぬつておきの姉妹の口論、それにつづくメーターとの衝突、さらにシシー叔母との激しいやりとりはルシイルのかくれた一面をみせている。やはり拘束された自我の暴発である。

二人の姉妹がすむパプルウィック Papplewick も淋しい、石のごろごろした土地であって、牧師館の冷たい生活の空気を象徴しているようにおもえる。

父親はイヴェットを盲愛している。それがイヴェットの我儘の原因だとシシーは考えているほどである。イヴェットは自分の美しいデリケートな肉体を母親からうけていると考えていた。父親の血筋